

佐賀県教育センター 所 報

No. 58

も く じ

- 巻頭言「二兎を追う」..... 1
- 平成3年度研修事業の実績と平成4年度の構想..... 2
- 指導のチェックポイント「高校生物」..... 4
- 指導のチェックポイント「特殊教育」..... 6
- 平成4年3月発行「研究紀要第16集の概要」..... 8
- 長期研修生寸感「研鑽を積む」..... 10
- 教育相談Q & A「再登校へ向けて」..... 12

巻 頭 言

二 兎 を 追 う

佐賀県教育センター 研修一課長 寺 田 範 男



教育センターではどういう仕事をしているのかとよく訊かれる。教員研修のための講座を企画・運営し、自分の専門教科・領域についてテーマを決めて研究を行っている。この研修と研究が教育センターの二本の柱であり、他にも関連業務がある。従って所員はたいがい二つか三つの仕事を並行して進めていると言うと、それは大変でしょうね、とねぎらいと同情の声が返ってくる。ところが時として、そんなことができるのか、どうせたいした仕事ではないのだろうといった顔をされることもある。

科学雑誌「ニュートン」の編集長である竹内均さんは五十冊分の仕事を同時に、しかも順序をばらばらにして進行させているということである。一つの仕事だけしか持たないと、それが行き詰まった場合は仕事は何もできなくなってしまう。五十もテーマを抱えていると、三十が行き詰まっても二十が残る。テーマを変えることにより気分転換にもなるというのである。

「二兎を追う者は一兎をも得ず」とか「あぶなち取らず」と言う。確かに、一つのことに専念することは大事なことである。あれもこれも欲げると全部失敗するかも知

れない。しかし、やり方次第では全部うまく行くことだって大いにあるのである。今までの仕事を振り返ってみると、時間に余裕があり、そのみに専念した仕事は往往にして結果的にはあまりぱっとしないことがある。むしろ、多忙の中で同時並行して進めた複数の仕事の方が満足できる結果を生んでいるのである。仕事内容の違いはあっても、それを成し遂げようとするエネルギーみたいなものが相呼応して、相乗的な効果を生み出しているのかも知れない。

複数の仕事を並行して進めるという竹内さんの発想は教育センターの業務を遂行する上で大いに参考になる。少し仕事がかさむとついぐちをこぼしたくなる。泣き言も言いたくなる。しかし、することが多いということは、失敗もあるかも知れないけれども、立派な仕事をする可能性もそれだけ多いということである。そのことを幸せに思い、「いやしくもするに足ることなら立派にやり遂げる価値がある」わけであるから、教員研修を始めとする種々のセンター業務を行う中で、今後も二兎を、時には三兎をも追う決意を新たにしているこのごろである。

平成3年度研修事業(短期研修講座)の 実績と平成4年度の構想

1 平成3年度の実績

(1) 短期研修講座実施にあたっての基本的な考え方は、次のとおりである。

- 教職員の資質・能力の向上に役立つために、計画的かつ効果的な研修を行う。
- 研修内容の改善・充実を図り、教育指導上の課題や社会の変化に対応した実践的研修を行う。

- 研修方法に創意工夫を加え、受講者が研修に意欲的に参加できるように努める。

これらを柱として、126本の講座を実施した。受講者総数は2,764名で、上記3点の目標をほぼ達成できた。

(2) 本年度から改善された点について
時代の要請と学習指導要領の本格実施に向けて、各講座内容や講座を厳選し現場実践に即応する講座を開催した。

更に、以下の講座を開設・新設した。

- ① 豊かな情操と感性を育むために
発達段階に応じた研修にするために、小学校音楽科講座を低学年・中学年・高学年の3講座に増やした。定員72名に対し、144名の受講希望で72名が受講した。
更に、中学校美術科講座を新設した。

- ② 情報化に対応するために
「パソコン教育拡充計画」に則り、パソコン教育利用に関する研修講座を、平成3年度は以下の様に整理統合した。

- ・ 3年間継続受講のパソコン初・中・上級講座を2年間の継続受講とした。
- ・ パソコン断続研修1・2班講座の名称を、パソコン断続研修(基礎)・パソコン断続研修(応用)講座と名称変更をし講座内容の精選を図った。

- ③ 家庭科教育の充実のために
小学校家庭科講座を新設した。

- ④ 「登校拒否」問題に対応するために
急増する「登校拒否」は、子供・親・教師にとって緊急な問題であるため、「登校拒否」に関する公開講座を実施した。

(3) 短期研修講座の領域別、校種別受講状況

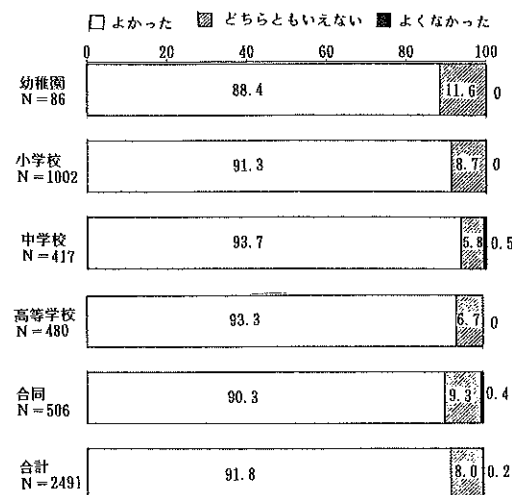
講座の領域	校 種	講座数	定 員	受講者数
教 育 経 営 国・社・算・数・生 技・家・理・英・音 図・美	小 学 校	30	750	764
	中 学 校	18	334	275
	高 等 学 校	17	288	251
	合同(小・中・高)	2	52	46
教 育 経 営 道徳・特活・へき地 評価・学校・学級経営 事務	小 学 校	8	260	219
	中 学 校	5	140	104
	高 等 学 校	5	155	159
	合同(小・中・高)	4	95	75
教 育 相 談 情報処理・CAI教育 教育工学	幼 稚 園	1	80	92
	合同(小・中・高)	10	286	418
	小 学 校	4	96	96
	中 学 校	4	96	87
合 計	高 等 学 校	11	152	98
	合同(小・中・高)	7	78	80
総 合 計		126	2,862	2,764

(4) 講師招聘状況

地 域	実 績
県 内	大学等(佐大、短大他) 97名
	教職員、教育庁関係 214名
県 外	九州内大学等 44名
	近畿以西大学等 16名
	中部以東大学等 9名
総 計	380名

(5) 受講後のアンケート調査結果

① 短期研修講座の感想



② 教育実践に役立った講座内容

ア 原理・理論的なもの

- 本県教育の現状とこれからの課題
- 教師としての自覚、教育実践の反省と今後の心構え
- 学習指導要領改訂の趣旨や新学習指導要領改善点に伴う指導の在り方
- 教科・領域等に関する効果的な学習指導方法
- 学級経営の心構え及び教育相談と児童生徒理解・指導

イ 実践的なもの

- 現場教師による具体的な実践発表
- 授業参観及び授業研究会
- 授業分析の方法やその生かし方
- 教材・教具・資料等の作成方法とその効果的な活用法

ウ 実技、演習的なもの

- 学習指導案の作成
- パソコンの基礎技能習得
- 歌唱・発声法・デザイン・絵画の指導法と実技

エ 情報交換的なもの

- 学習指導・学級経営に関する意見交換
- 実践発表での意見や情報交換
- 校種を超えた先生方との情報交換

③ 受講後における現場での利用状況

- 講座内容や講座講師の教育理論・方法実践等を日常の授業実践や生徒理解、教育相談に生かしている。

- 実技・演習で習得したものを、実際の授業で活用している。

④ 公開講座後の受講者の感想

「登校拒否児の分析・理解することについてわかり易く指摘していただき大変参考になりました。その子とつき合っていくこと肝に銘じて対応していきます」(42才女)

「“教師は人格である” “教師も人間としての生き方を探していく” という講師の言葉が心に残りました。自分を振り返るよい機会でした。」(33才女)

「登校拒否の原因にコンプレックスがありそれをしっかりつかむ重要性和、教師と生徒との心の結び付きがやはり大切であることがよくわかりました。」(46才女)

2 平成4年度の構想

平成3年度は、時代の要請と学習指導要領の本格実施に即応するために、講座の内容・講師を精選した。新年度はこれを更に進め、次のような講座を復活・新設・厳選を進める。

① 情報化に対応するために

新たに、全ての校種を対象にしたパソコン言語講座3本を新設する。更に、教育現場の要望に応じて、教育機器講座を復活する。

② 研修講座充実のために

センター研修講座が受講しやすいように、日程等考慮する。また、日常の指導実践に生きて働く内容・講師を厳選する。

更に、時代の要請や教育現場のニーズに即応するために、公開講座等を実施する。

<付表1>短期研修講座(校種別概要)

校 種	講 座 数	受 講 定 員
幼 稚 園	1	80
小 学 校	39	1,042
中 学 校	26	536
高 等 学 校	33	541
合同(幼・小・中・高・特)	25	609
計	124	2,808

<付表2>短期研修講座(領域別概要)

領 域 等	講座数	講座日数	受講定員
教科教育関係講座	66	170	1,414
教育経営関係講座	22	49	670
教育相談関係講座	11	51	330
情報教育関係講座	25	158	394
計	124	428	2,808

3 おわりに

平成4年度から本格実施される新学習指導要領への対応を、より円滑に行えるよう当教育センターでは、研修講座の一部改廃とその内容の充実を検討してまいりました。

よりよい研修講座を設定し、幼児・児童生徒の調和のとれた成長・発達のために、役立ちたいと念じております。

生物教材の工夫と確保

—動物の発生を中心に—

佐賀県教育センター 研究員 坂本 兼 吾



1 はじめに

現行の学習指導要領では「観察・実験などを通して」と示されてきたが、今回の改訂では「観察・実験などを行い」となり、自然に対する直接経験を一段と重視し、探究活動を通して科学の方法を習得させることとなっている。

これを達成させるためには、実験内容を吟味し、これまで以上に実験時間の確保に努め、さらに、具体的で分かりやすく、興味・関心を引くような教材の工夫が必要であると考えられる。そこで、「生命の連続性」や「細胞から個体へ」の中で扱われる「発生過程とそのしくみ」を中心に引き上げ、教材の工夫と確保について考えたい。

2 教材の工夫と確保

発生過程を理解させるためにはまず実物を提示し、興味・関心を引くことが肝要と思われる。また、動的にその変化を観察させるために視聴覚機器を用い、さらに、立体的な構造を捉えさせるための教材の工夫が必要と思われる。内容を定着させるためには、作業をともし教材の提示も効果がある。

(1) 実物の提示

発生の観察には、原腸体腔系では内部が透明で観察しやすいウニ類が用いられる。冬季にはバフンウニ(産卵期が12月～4月)などに塩化カリウム溶液を注射し放卵放精させ、顕微鏡下で受精後の発生を観る。また、脊椎動物では両生類が用いられる。飼育が容易で常時人工産卵が可能なアフリカツメガエルもよく利用されているものの、卵の大きさが1.2～1.4mmとやや小さいため観察しにくい。卵の大きさがやや大きい(2.5mm前後)ものにヤマアカガエルがある。ヤマアカガエルの産卵場所は、山地の周年を通して湧水が流入している所に限られて

いる。場所を確認しておく、1月下旬から2月上旬にかけて暖かい雨が降った日の翌朝に受精卵を多数採集することができる。これを発生段階を追いながら順次10%ホルマリンで固定しておく、胚の全体や縦横断面をとって内部の観察に利用できる。また、雑木林の周辺部にある側溝などに普通に見られるカスミサシヨウウオ(産卵期は2月から3月)は卵が大きい(3.8mm前後)ため肉眼での観察に適している。これをスクリーン管に入れ、生徒に配布しておく、生徒は生きた状態での発生過程をつぶさに観察することができ、生徒の興味・関心を引き起こすことができる。新指導要領の探究活動や課題研究にも応用できる。

(2) 視聴覚機器の利用

長時間にわたる発生過程を限られた授業時間内に観察させることは不可能である。そこで、予めビデオテープに収録し編集しておく、時間を追って動的にその変化を観察させることができる。局所生体染色法など学校現場ではできにくい実験については放送番組等の画像を提示することも必要であるが、できれば顕微鏡テレビ装置を用いて自作のビデオ教材をつくり、これを提示したい。エピソードも含めて説明できるので、生徒の情動に訴えることができる。

(3) 教材の工夫

発生過程とその仕組みを理解する上で、胚の構造を立体的に捉えさせる必要がある。そこで、次のような工夫を試みた。まず、油粘土を用いて胞胚や囊胚の模型を作る。その際、外観は同じでも内部の構造が異なるものを作っておき、比較対照とする。油粘土は安価で工作が容易であり、糸を用いて切断し縦横断面をとると内部構造を立体的に説明することができる。(1)で述べた固定した各種胚を解剖顕微鏡下で断面をとり、内部を観察させる際に、上記の模型を用い

て説明を加えると理解を助ける。

小麦粘土には色素を加えたカラフルなものがあるので、これを用いて模型を作ると胚葉形成、器官形成のようすを色彩を用いて立体的に示すことができる。

(4) 作業教材の提示

生徒に興味をもたせ、集中させる一つの工夫として、積極的に手を動かせる作業教材がある。

たとえば、両生類の神経胚の縦断面図(図1)と横断面図(図2)を与え、両図とも各胚葉に色鉛筆で着色させる。その後図2を切り取り、点線に沿って折り曲げ裏に糊をつけ、図1に貼りつけると胚の構造を立体的に見ることができる。

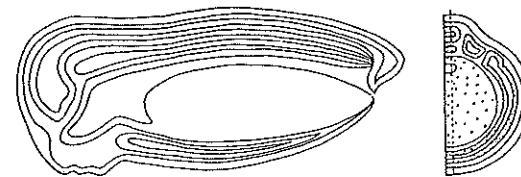


図1 縦断面図

図2 横断面図

また、ヒトを中心とした内容の生物ⅠAに利用できる「ヒトの発生図」がある。図3のようなヒトの発生過程の模式図を与え(一部は実物大とする)、各図を切り離して段階別に別紙に貼付させる。これにより胚の発生における大きさの変化や器官形成の状態などを追うことができる。

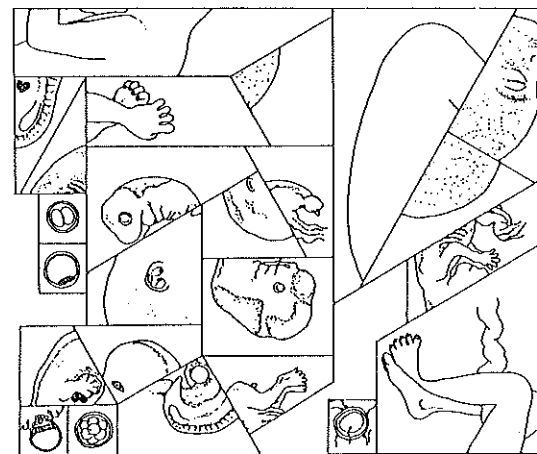


図3 ヒトの発生図

発生に伴う細胞の分化をDNAの形質発現メカニズムに求めることができる。形質の発現には、細胞の中で核の内外に存在するRNAが重要な働きを持っているため、これを中心に特定の性質を持つタンパク質合成の仕組みを図4の実習プリント(書き込み式)で学習させることができる。

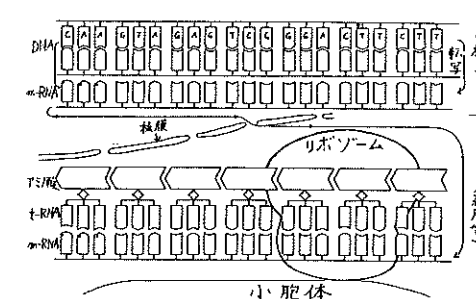


図4 タンパク質の合成

図4と同じようなものを拡大し、厚紙と板磁石などを用いて制作しておき、教師演習用として使用する。これは、各ヌクレオチドを多数準備することにより、DNAの複製の仕組みを具体的に説明することもできる。また、各塩基を取り外し可能な形にしておくと、遺伝子突然変異による異種タンパク質合成の説明にも利用できる。

以上のように、生きた教材を確保し、生徒の視覚に訴え、さらに、指導に工夫を加えると、生徒は関心を持って探究し考察を深めて、充実した授業になるものと考えている。

3 おわりに

発生分野を中心に教材の工夫と確保などについて述べてきたが、多くの教師が様々な分野で工夫している教材や指導法などの情報をお互いに交換し合うと、さらに充実した生物教育が実施できるものと確信する。

最近、蛾類の研究に情熱を燃やしている教師の研究授業を参観する機会を得た。自らの研究の一端を教材として用いた授業では、生徒たちが郷土の自然を目の当たりにして熱心に聞き入っていた。生物の教師としては、教師自身が生き物や自然の中でのめり込み、生徒と一体になって探究することが本来の姿であるかも知れない。

指導のチェックポイント・特殊教育

多動を考える

— 多動行動を示す子どもたちの理解と指導 —

佐賀県教育センター 研究員 島 英 彰



1 はじめに

多動症候群や学習障害児(LD)をはじめとして最近、このような子どもたちに対する関心が高まってきています。文部省では通級学級に関する調査研究協力会議を設け、通級に関する問題及び学習障害児について調査研究が行われており、昨年7月に中間まとめが提出されました。

当教育センターの電話相談でも、「知的には普通であるのに、授業中落ち着きがなくなったり教室を出てしまうことがあります。どうしたら良いのでしょうか。」「学習障害児(LD)と微細脳機能障害(MBD)はどう違いますか。」等の相談や質問を受けることがあります。

そこで、多動行動について考えてみたいと思います。

2 多動について

注意散漫で落ち着きがない、落ち着いて机に座って学習するのが難しい、感情的になりやすく衝動的な行動をとりやすい等の行動を示す子どもたちがいます。このような子どもたちの中で、他の障害があまり見あたらない子どもたちは多動症候群、多動児等と呼ばれています。

このような子どもたちは、同年齢の子どもたちと比較して、多動すぎるとか衝動的な行動をするというだけでなく、注意の集中や持続が難しかったり、場面や状況に合った行動をとれなかったり、指先が不器用だったりします。まわりの大人から見れば、ともすると「変わった子ども」、「わがままな子ども」、「困った子ども」等と思われるかもしれません。

多動行動は学習障害、自閉症、重い知恵遅れ、言語発達遅滞等の障害児においても比較的多くみられます。

しかしながら、多動などの問題行動はま

わりの大人の理解や配慮、刺激の統制や生活環境の構造化、まわりの子どもたちとの関係の改善等をはかることによって、かなり軽減できます。

3 多動行動の背景とその理解

集会の時に列から離れて大声を出すなど、まわりの大人から見れば、「集会の雰囲気が出ないだ。」「ああ、またあの子どもが大声を出している。」等ちょっと理解できない行動に見えても、わざとしているのではありません。どうしても自分を抑えることができずに、また、どうして良いか分からずに、その場面にそぐわない行動をしているかもしれない、と考えることもできます。

わたしたち教師はそんな行動をとらえて、「どうしてこの子どもはあんな行動をするのだろうか。」と疑問や落胆を感じてしまったり、「いろいろ指導してもなかなか効果が上がらない。なかなか良くならないのはやっぱり障害のせいだろうか。」と問題行動を子どもの障害のせいにしてしまうのですが、冷静になって子どもを見つめる目が必要になってきます。つまり、目先の行動にのみ目を向けるのではなく、その子どもの全体像や多動行動をはじめとするいろいろな問題行動の背景をじっくり考えることが、その子どもを理解していくステップとなると思います。

(1) 器質的・身体的な要因や背景

多動症候群も学習障害(LD)等と同じように、現在ではなんらかの脳機能障害と考えられています。一般には、発達が進むにつれて10歳前後をさかいとして落ち着いてくると言われています。しかしながら、その特徴や症状は個々のケースによってずいぶん違ってきます。

著しい多動がある場合は専門医に相談すべきでしょう。

(2) 環境的・心理的な要因や背景

親や教師が子どもの実態や個性に関係なく高いレベルのものを求めたり、過干渉だったり、過度の期待をしたりすると、情緒が不安定になり落ち着きのない行動を示しやすくなります。

発達障害の子どもについても、遅れを取り戻そう、伸ばそうとあせる気持ちのあまり、無理な要求をし、そのことが逆に問題行動を引き起こすひきかえになることがあります。

4 多動行動に対するその対応

多動などの問題行動は子ども自身に行動の見通しが立たないような時や、他の刺激に過剰に反応して肝心の対象に注意を向けることができない時、その子どもにとって課題が難しく混乱している時等に多く見られます。

したがって、多動行動ばかりでなくその時の状況や、子どもへのかかわり方などを整理して、指導の手がかりを見つけていく必要があります。

子どもの全体像と多動行動の整理

- その子どもの出生から現在までをまとめてみる。
 - ・ 出産時、乳幼児期の身体的・精神的な発達状況
 - ・ 幼稚園、保育園での生活の様子
 - ・ 家庭での行動の様子
 - ・ 好きなことや興味のあること
 - ・ 親や家族のかかわり方
- どんな時多動行動をするのか。
- 状況(体調、日時、曜日、場面等)によって変化するか。
- 多動行動に対しどんな働きかけをしたか。
- それに対してどう反応したか。

5 担任として心がけたいこと

(1) 興味・関心のあるものを見つける

子どもの好きなもの、興味があるもの等を教材として取り上げてみることも大切です。車、カレンダー、電車等なんでも良いと思います。それらの教材を用い、適切なかかわりをする中で望ましい行動を引き出

すことができるのではないのでしょうか。

(2) 積極的にほめる

だれでもほめられるのは嬉しいものです。普通の子どもたちにとっては、当たり前に行えることであっても、自分を抑えてがまんしたり、少しでも工夫したことをとらえてほめるように心がけることが大切です。良く言われることですが、1回大きくほめるより、小さなほめ言葉を数多くすることが、その行動を強めることになります。

(3) 努めて体を動かす

体育の時間はもちろんですが、休み時間等にマラソンをしたり、大型遊具などで遊んだりして体を良く動かしていくことも、多動行動を減少させるのに有効です。

(4) 学習環境を整える

あまりに広い空間やたくさんの刺激環境は多動を増加させると言われています。落ち着いた学習環境に気を配ることも大切です。

(5) 子どもにとって分かりやすい課題提示や言葉かけをする

課題を与える時は、ゆっくり簡潔な言葉で伝えたり、板書したりして視覚的な刺激を加える等の工夫をすることも必要です。

(6) 仲間づくりに配慮する

多動の子どもはまわりの子どもたちとの関係をうまくとるのはなかなか難しいようです。学級の中に支えとなってくれる友人をつくることも大切です。

6 おわりに

これまで、多動行動を示す子どもたちの理解と指導についていくつか述べてきましたが、これらの子どもたちの学校生活への適応や問題行動の改善のためには、担任だけで解決できるものではなく、その子どもを見守る家族や学校の職員、学級の子どもの理解と協力、支えがどうしても必要です。事例研究会を設け話しあったり、職員会議、職員朝会等の場でその子どもに対する取り組みや変化を報告したり、他の職員に学級行事へ参加してもらおう等、その子どもに関する共通理解を深め協力して指導できる体制づくりをすることが求められます。

平成4年3月発行

研究紀要第16集の概要

国際理解教育

国際的視野をもった人間性の育成に関する研究
～教科指導や交流活動を通して～

本研究は、国際理解教育の在り方や指導法について、その目標や内容を明らかにし、授業で直接外国人を活用したり、交流活動を工夫したものである。実践にあたっては、小学校生活科、中学校特別活動、高等学校理科生物の教科等・領域においてAETや外国人留学生等を活用して取り組み、指導法を探ってみた。

小学校生活科

小学校生活科学習指導法に関する研究
～年間指導計画作成と地域のお祭りを学習素材にした授業づくりを通して～

これまでの移行期間における生活科指導実践の反省から、生活科の最終目標である「自立の基礎づくり」を中心にすえた生活科指導の在り方を探ってみた。そのために、4つの観点から「目指す子ども像」を想定し授業実践を試みた。その実践は、地域素材の「お祭り」の指導を通して、3人の抽出児の活動を追い、考察を加えたものである。

小学校理科

生活実感をもとにした理科学習指導の工夫
～「光」「熱」の領域の指導について～

物理領域の指導においては、実験室内で共通の結果が得やすいために理科室だけで完結する学習になりやすい。そのために、生活の中で児童が持っている事象についての考え方を学習に引き出し、学習の成果を生活に活かすことを軽んじる傾向があったのではないかと。児童の生活実感と理科の学習内容の差をどう指導に結び付けるか、指導の在り方をさぐってみた。

小学校特別活動

小学校における学校行事に関する調査研究

この調査研究は、学校及び教師、児童を対象にし、学校行事の活動状況と教師及び児童が学校行事をどうとらえているかとい

う意識の実態を把握し、指導法改善への手がかりに資するために実施したものである。その結果、次のことなどが明らかになった。行事を実施する場合、ねらいに対する教師間の共通理解が不足していること。年間行事数のとらえ方が教師と児童では大きく違うこと。

小学校CAI

小学校におけるパソコンの教育利用について
～教育用ソフトウェアの評価法の開発～

コンピュータを授業で効果的に利用するために、利用教科や利用場面、利用事例等を提供できるようなソフトウェアの評価法を開発した。今回開発した評価法は、アンケート調査による方法であり、この評価法を用いることにより、授業で利用するソフトウェアの選定が容易になる。

中学校学級経営

望ましい学級づくりをめざした
学年経営に関する研究

望ましい学級づくりの問題点として学級間の格差が指摘されている。同一学年集団が足並をそろえ、一体となって望ましい集団に成長することが要求されている。本研究では、学級・学年経営の現状と問題点を明らかにした結果、効率的な学年会と学年行事への教師の指導体制の在り方の面から望ましい学級・学年経営の指導の方途を探ってみた。

中学校CAI

中学校におけるパソコンの教育利用について
～野外観察学習支援「OutDoor」を使った授業の設計と実践～

中学1年理科の野外観察学習におけるパソコン利用のあり方、ソフトウェアの改良、ソフトウェア開発・研究推進の方法を検討した。野外観察学習において「OutDoor」が有効に機能し得ることが示されたが、生徒の主体的な探究活動をさらに促進するためには、継続した授業実践やソフトウェアの工夫が必要であることが示された。

高校数学

高等学校数学標準学力テストに関する研究

本研究委員会では、県下の各高等学校の先生方の協力を得て、参加希望の高等学校生徒を対象に、数学I(基本)、数学I、代数幾何、基礎解析についての標準学力テストを実施し、結果の集計、分析、考察を行った。この報告書は平成2年度分についてまとめたものである。掲載資料は、検査のすべての問題、平均点、標準偏差、問題別正答率、無答率、誤答率、各科目の得点の分布表などである。

高校理科物理

コンピュータの制御・計測機能を用いた基礎物理実験
～インターフェイス・A/D変換装置を用いて～

新学習指導要領では、理科教育を充実させるために、観察・実験を重視すると共にコンピュータの活用を図るように指示されている。そこで、観察・実験のできにくい事項の中から、生徒の興味・関心を高め、学習効果を上げるための実験を選び、「音声信号の波形や振動数測定」、「気体や固体を伝わる音速の測定」を行った。

高校理科化学

新学習指導要領の目指す「化学I A」の指導について
～身近な素材を生かした化学教育における実験教材の開発～

「化学I A」は、日常生活と関係の深い化学的な事物・現象に関する探求活動を通して、化学的な見方や考え方を養うことになっている。本研究では、「昆布からのI₂の単離」「空気中のO₂の成分比」「食品保存の原理」「銅の精錬」「西洋紙作り」等の身近な素材による実験の開発を行った。

高校理科地学

試作ビデオを用いた「火成岩の指導法」の一考察

本県教育センターでは、毎年十数本の貴重な調査・研究報告がなされている。しかし、紀要の活用・検討の様子や研究の積み上げが見えない。そこで、教育工学研究委員会(S63)で作成したビデオ「佐賀県に分布する火成岩」の活用状況や教師の感想と生徒の評価テスト等の調査を行った。また、ビデオの有効性について、二群法による検証を試みた。その結果を紹介している。

高校CAI

高等学校におけるパソコンの教育利用について
～教育ソフトウェアのデータベース化を図るシステムプログラムの開発(2)～

本研究委員会が昨年度開発したシステムプログラム「CAI-MENU」を、平成3年度より構築を開始した教育用ソフトウェア・ライブラリーの登録用ソフトとして使用できるように、利用実践をとおしての機能のバージョンアップ、県下に整備されている複数の機種に対応するための移植、及び利用方法の検討についての報告である。



研究委員会における研究内容の検討

教育工学

教材としてのビデオ番組の制作
～小学校理科～

理科では、観察、実験などの直接経験が重視されているが、実際には校内や学校周辺に適当な観察地がないとか、時間的な面や児童の安全管理の面などから必ずしも直接経験ができるとは限らない。これを補う一つの手段としてビデオの利用がある。今回は第4学年理科の学習内容から、佐賀県の自然を生かせる単元として「流れる水のはたらき」を選び、ビデオ教材化を試みた。

教育相談

登校拒否児童・生徒の予後調査

昭和55年度～昭和62年度の8年間に、登校拒否を主訴として来所した児童・生徒の予後調査し、登校拒否への望ましい援助のあり方を探ろうとするものである。調査の結果、現在8割以上の者が学校・社会に適応していた。援助のあり方として、家庭、学校、専門機関の連携が大切であること。また、6ヶ月から1年をめどに、「節目」にむけて、登校を促すような働きかけも有効に作用することなどが明らかになった。

長期研修生寸感

研鑽を積む

宝の山を掘りあてる ～小学校国語～
切木小学校 宮原 久直

センターは宝の山である。多くの書物、優れた先生方、校種をこえた仲間たち。厳しく辛い研修の日々ではあるが、光輝く黄金に包まれて、満ち足りた時を送っている。多くの宝を財産に実践で生かしていきたい。

研修雑感 ～小学校社会～
西川副小学校 富吉 猛

いかにして「追究の鬼」を育てるか。頭の中に、目指す子どもの姿を思い浮かべながら、所員の先生方に指導を求め、文献を読み思索し、仲間と議論を交わし、毎日が過ぎていく。我、追究の鬼に成りにけり。

貴重な体験 ～小学校算数～
北茂安小学校 道田 正博

「毎日、本とパソコンとのにらめっこ」これだけ一つのことに時間をかけて、取り組めることは二度とないだろう。だが、すればする程難しい。研修を原点にし、新しい気持ちで再出発したいと思う。

のぼり坂 ～小学校理科～
佐志小学校 福田浩一郎

長期研修で、研究の初歩・難しさ、仕事の厳しさ、人の優しさ、さらに自分の未熟さを知った。担当の先生の励ましの言葉「苦しい時は、のぼり坂」を肝に銘じ、今後も長いのぼり坂を歩いて行こうと思う。

雑感 ～小学校理科～
勸興小学校 晴氣 和明

学校にもどる日が近づく。自分の研修が果たして現場で生かせるか不安な気もする。センターでの半年はもう二度とめぐってこないかもしれない貴重な時間である。多くを学びこれからの仕事に生かしたい。

指導にあたって ～小学校理科～
山代東小学校 池田 信也

指導の前に自分なりに明確な単元観を持

つことの重要性和、そのためにはまず自分でやってみることの大切さを痛感した。現場や研究領域を異にする先生方との交流もでき、毎日が新鮮であった。

センターでの宝物 ～小学校道徳～
神埼小学校 横尾 芳幸

研修につき、はや4ヶ月。児童生徒の立場に立って本質的に教育技術を研究される先生や児童生徒の理解に情熱を注がれる心優しい先生との出会い。この喜びを今後の教育の糧として、研修に励みたいと思う。

燃える心 ～小学校特別活動～
轟小学校 中島 和芳

自分のめあてをもち、見通しをたて、楽しく学ぶ。生涯学習の喜びを児童にうつす前に、この場で知に徳に体に体験できた。この研修で培った向上心を忘れることなく、現場にもどっても完全燃焼していきたい。

収穫 ～小学校CAI教育～
伊万里小学校 前山純一郎

自分のテーマについての研修を積むと同時に、校種や領域・分野そして地域を越えてたくさんの先生方と出会い、様々な生き方や考え方に触れることができたことも今回の研修の大きな収穫だと感じている。

日々研鑽・日々反省 ～中学校社会～
北茂安中学校 野口 敏雄

長研生としての教育センターでの1日は短い。文献を読み、図書資料室で資料収集、ワープロに向かって頭をひねっていると、もう5時。満足できる研究の到達点には届かず、常に、新しい課題発見の連続である。

自分を知る ～中学校数学～
富士中学校 糸山 正孝

あっという間の四ヶ月。中学校の先生ばかりでなく、小学校、高校と多くの先生と出会い、ふれあい、語り合った。得ることが多く、いかに知らないことが多かったかを知ることができた。

自分との闘い ～中学校理科～
嬉野中学校 梶山 厚

自分に与えられた時間をいかに有効に使っていくか、毎日毎日が自分自身との闘いである。学校から離れ、これまでの教師生活の事、自分自身の事を見つめ直すことができた。今、力を貯えている。

想い ～中学校教育相談～
昭栄中学校 森山 洋一

今、研修生を見ながら忙しいなあと思う。私はこの研修に参加してなぜか楽しい気分と焦る自分を感じる。残す月日を有意義に、そしてリラックスした感じで過ごせるようにと思う今日この頃である。

である前に ～中学校教育評価～
基里中学校 牛島 一孝

研修の日々を送る度に「である前に」と思う。研修で得る情報の多さに、自分の器の大きさ、姿勢、素直さが問われるものである。自分にもっと厳しく、方向性のある研修を積んでいきたい。

自分を見つめる ～中学校特別活動～
国見中学校 杉原 豊樹

読みたかった本がゆっくり読め、今までの自分を反省し、ここで学んだことをこれからの指導に役立てたいと思っている。支持的風土＝相手の立場になって考える優しく暖かい心を持った教師をめざしたい。

カルチャーショック ～中学校CAI教育～
鍋島中学校 杉町 徹

教育センターでコンピュータに関わった研修をしているおかげであろう、正月のTVで再放送された「電子立国日本」を見てなんともいえない感動を覚えた。研究だけを考えていい故の感覚と感謝している。

今後の課題 ～県立学校特殊教育～
大和養護学校 亀山 早苗

本をじっくり読み、面接に当たり、その記録をとる。領域や分野を越えて多くの先生とふれ合う。そんな、アッという間の四ヶ月だった。この研修で得たことを、どのように生かすかが、今後の課題である。

切磋琢磨 ～県立学校特殊教育～
伊万里養護学校 樋口 英司

専門の枠をこえ、長期研修という土俵に上がり、お互いを高めあう。時には鋭い指摘を受けた。未知のことを知ることでもできた。これからは、一皮むけた自分で新しい事に挑戦していこうと思う。

學びて厭はず ～高等学校国語～
唐津北高等学校 吉田 仁

論語に「子曰く、學びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや。朋、遠方より来る有り、亦樂しからずや。人知らずして慍みず、亦君子ならずや。」とある。長期研修で得たことを今後の教員生活に生かしていきたい。

志 ～高等学校理科～
白石高等学校 中原 正登

自然環境の保全が強く叫ばれている今、自分の抱く問題意識を生徒に伝えようとの志をもって始めた長期研修。しかし、一朝一夕に効果は出ないもの。長研をきっかけに今後も志だけは失いたくないものだ。

今、これから ～高等学校教育相談～
鳥栖工業高等学校 土師 啓利

研修に来てよく感じることは、人の話を聞くことや気持ちをわかることの難しさである。教育相談は、結局、自己修養である。10年後、この研修の成果がどうなっているかが問題。長い目でみて、生かしたい。

日々研鑽 ～情報処理(商業)～
鳥栖商業高等学校 深町 俊善

この研修で今までの自分の勉強不足をつくづく痛感させられた。今のレベルに満足することなく、次のステップへ挑戦する姿勢を忘れないように、これからのがんばっていききたいと思う。

充実感 ～情報処理(農業)～
佐賀農業高等学校 山口 義之

手懸りのつかめないまま研修に入り、パソコンのハード(計測・制御)製作に取り組み、ハンダゴテ片手に失敗を繰返しながらも機器が動作した時の安堵と充実感。また、心の和む同僚に恵まれ感謝している。

教育相談Q & A

再登校へ向けて!!

——「対人関係の緊張」から登校拒否になったE子の事例と対応——

Q 中2の女子です。交友関係が広くいつも明るく、冗談ばかり言っていた学級の人気者E子が、風邪がきっかけで学校を休みだして3ヶ月が経ち、訪問をしても会えない状態が続いています。家では部屋に閉じこもって、何をするでもなく一日を送っているとのこと。担任としてどう対応すればよいのでしょうか。

A 母親と担任の先生が来所されました。「E子ぐらい友達が多く、人と上手につきあう子どもはいません。学級になかなかじめない転校生がいたのですが、E子はつきっきりで世話をやき、とうとうみんなの仲間に入れてしまいました。そんなE子が登校できなくなるなんて、どうしていいのかわからない」と頭を抱えこんだ先生。「小学校時代のE子は学級の人気者で、たくさんの友達に恵まれ、学校が大好きだった。ところが、10月頃から何となく投げやりになってきたので注意したら、いきなりカバンを投げ出して、『私は一度だって学校が楽しいと思ったことはなかった。あんな所は気ばかりつかって、もういやになってしまふ』と叫ぶんです。私はあまりに日頃の娘にそぐわない言葉だったので、そのまま聞き流してしまったのですが…」とお母さん。どちらのとらえ方も、本来のE子から少しずれていたようです。そこで、先生と母親に「友達の目が気になって、対人関係が過敏になり、必要以上に明るくふるまったり、おしゃべりになる子どもがいること」を話してみました。やがて、母親か

ら「E子は家では静かな消極的な子どもで、小学校4年生までは、学校でも同じような子どもでした。しかし周りの人には大変気をつかうところがあった」と語られた。先生も「そういえば教室でも時々ジッと考えごとをしていることがあり、声をかけると急に明るく、大声でしゃべり出すことがあった」と身を乗り出してこられた。E子にとって、明るさ・冗談・おしゃべりのサービスは、自分の気持ちを何とか落ち着かせるためにとった懸命の努力だったわけです。友達にもなじめず、寂しそうな転校生は、E子にとって居ても立ってもいられないほど気になる存在だったのでしょう。なんとか仲間に入りたいと必死に関わった結果、転校生は学級に溶けこんでいった。しかし、いつも周りに気を配り、緊張が続くあまりE子自身が発熱し、疲れきって、何も手につかなくなったものと思われます。

E子の状態が見えてきたところで、対応について考えてみました。母親には、E子が不満をぶつけてきた時は、それをじっくりと聴き、E子の気持ちを受け止めるように関わってもらおう。先生には、母親を経由して手紙を届けてもらいました。先生からの手紙は、やがて学級の様子やみんなの想い、転校生が待っていること等、友人からの便りも一緒に加わった定期便と変わっていきました。また学級では、“人の目を気にする自分”のテーマで、道徳や学級活動の時間を使って討論が深まっていきました。討論会の様子を伝えるテープが、定期便で届き、それを聞いたE子から、先生と学級の友達に初めて便りが返ってきました。

編集後記

本年度は、新企画として「教育相談Q & A」を連載しました。教育実践における参考資料となられたでしょうか。先生方の御意見、御感想を遠慮なくお寄せください。

発行 佐賀県教育センター
〒840-02 佐賀郡大和町大字川上字西山
(TEL) 0952-62-5211
(FAX) 0952-62-6404